

## 発 達 236

韓国語において被動作主を表す  
助詞 -eul/reul の獲得○朴 媛淑 田原俊司 伊藤武彦  
(東京大学) (神田外語大学) (和光大学)

韓国語では、格関係を標示するために助詞を用い、その助詞は格の確定に重要な役割を果たすことが実験によって確かめられている(田原ら、1987)。格関係の理解の問題に関してみると、韓国語の助詞は、日本語の助詞がそうであるように、表層では動詞と対応してその意味が一義的に解釈されるが、個々の助詞を取り出してその深層の意味を見ると多義的であるものが少なくない。本研究で問題にする助詞 -eul/reul と -i/ga も、深層格は多重であると考えられる。-eul/reul は、対格の助詞として日本語の助詞ヲのように直接目的語に付き他動詞の被動作主等を表すが、動作主を標示する用法はない。しかし、空間・時間の移動補語(道-eul/reul 通る; 夏休み-eul/reul 過ごす)と状況補語(希望に満ちた時代-eul/reul 生きる)や、場所格的役割として位置(馬-eul/reul 乗る)、方向(動物園-eru/reul 行く)等に付くことがある。一方、日本語の助詞ガに相当する -i/ga は、主格助詞として動作主や経験者等を表すが、受動文や可能文では逆に被動作主・被経験者等という直接目的語を表す。つまり -i/ga には動作などの主体を表す用法と対象を表す用法がある。したがって、他動詞文において、主体・対象を標示する際、-eul/reul よりも -i/ga の方がその用法において多重であるといえる。

このように、文法装置(助詞の種類)とそれが表す意味(ここでは動作主-被動作主の関係)が1対1対応していない場合には、標識力すなわち文法マーカの手掛りとしての強さ cue strength (MacWhinney et al. 1984) は弱くなることが予想される。伊藤ら(1986, 1987, in preparation)は、この標識力の一つとして動作主性という概念を用い、日本語の他動詞文において助詞ヲ・ガの標識力と獲得との関係をしらべた。日本語の場合、単文中で動作主-被動作主の関係を表す時に、助詞ヲは必ず被動作主をマークするのに対して、助詞ガは動作主、被動作主の両方をマークするので、1) 助詞ガよりも助詞ヲの標識力が強いこと、2) 発達のにも、標識力がより強い助詞ヲの方が助詞ガよりも早く獲得される、という仮説を立て、これを検証した。

本研究の目的は、伊藤ら(1987)が用いた日本語の助詞ヲに関する実験を韓国語で行うことによって、韓国語においても日本語と同様の結果がみいだされるかどうかを検証することにある。標識力という仮説構成概念が有

効であれば、日本語の助詞ヲとほぼ類似した機能を持つ目的格助詞 -eul/reul (以下 o)、助詞ガに対応した機能を持つ主格助詞 -i/ga (以下 s) においても、o の標識力は s の標識力よりも強く、獲得するのがより容易であるために、その獲得の時期は早いということが検証されるであろう。従って、もし韓国語において以上の仮説が支持されれば、格関係についての助詞の手掛りの強さは、 $o > s$  となり、田原ら(1987)の研究結果を踏まえると  $o > s > t$  の順になるであろう(s: 助詞ハに対応する韓国語の主題助詞 -eun/neun)。

## 方法

**被験者:** ソウル及びソウル近郊の幼稚園年中(4歳群)、年長(5歳群)の幼児、小学校1年(6歳群)、3年(8歳群)、5年(10歳群)の児童、中学校1年(12歳群)、3年(14歳群)の生徒、大人(大学生)の8群で、各群男女五人ずつ10名、計80名。

**実験材料:** 刺激文を録音したカセットテープ、ミニチュアの動物と小物、テープレコーダー、A4の白紙、記録用紙。

刺激文は、全体の実験計画では助詞 o の要因(φφφ・φφφ・φφφの3水準: φは助詞無しを示す)、動詞の位置の要因(NNV・VNN・NVNの3水準: Nは名詞、Vは動詞)、名詞の意味の要因(AA・AI・IAの3水準: AはANIMATE, IはINANIMATE)からなる27文型を、各文型に対して1文ずつ作成した合計27の文である。

1本のテープは、以上のような27文を録音し、同様の方法で4本のテープを作成する。また、NNV型の3文を録音したテープを作成し、練習文として用いた。この実験計画は、もともとBates et al.(1984)の研究等との交差言語的比較のためにデザインされたものである。今回の報告では、このうちのNNV文(ただしφφV文は除く)の結果にかぎって考察する。

**手続き:** A4の紙の上の、ランダムに置かれた12個のミニチュア・小物を命名することができるかどうかを確認した後、教示を与え、練習文のテープを聞かせる。練習文で実演することができたらミニチュア・小物の位置を変えて、4本のテープのうちの1本を実験者が無作為に選び出し、被験者に実演させる。終了後、2~3分の休憩をとった後、残った3本のテープからまた1本を無作為に選び、同様の手続きで実演させる。

Table 1  
助詞にもとづく正答率 (%)

語順助詞	正語順			逆語順		
	oφV	sφV	tφV	oφV	φsV	φtV
4歳群	93	100	97	38	43	20
5歳群	93	85	90	52	32	20
6歳群	93	92	92	73	47	12
8歳群	98	100	100	93	40	15
10歳群	100	100	100	95	58	28
12歳群	97	100	98	87	92	67
14歳群	98	97	98	93	85	63
大人	100	98	97	90	83	62
平均	97	96	96	78	60	36

(s: 主格助詞 -i/ga, t: 主題助詞 -eun/neun  
o: 目的格助詞 -eul/reul, φ: 助詞なし)

## 結果

Table 1 の φoV 文・oφV 文の2文型についての結果は今回の実験のデータの一部によっており、主格助詞sについてのsφV 文・φsV 文、主題助詞tについてのtφV 文・φtV 文の4文型は、田原ら(1987)の結果によるもので、助詞に基づいて動作主を選択した率(正答率)を示している。ここでの正答とは、正語順(φoV 文・sφV 文・tφV 文)では第一名詞を、逆語順(oφV 文・φsV 文・φtV 文)では第二名詞を動作主とした反応を指す。

Table 1 に見られるように、動作主-被動作主-動作という順に表層化される、いわゆる正語順の3文型(φoV 文・sφV 文・tφV 文)では、正答率は4歳群より高く、年齢群間差があまり大きくなかった。文型間差が顕著に認められるのは、第一名詞が被動作主にあたる、いわゆる逆語順の3文型(oφV 文・φsV 文・φtV 文)で、4歳群を除いた全年齢を通してそれらの正答率を比較すると、oφV 文>φsV 文>φtV 文という順序で、oの標識力はsやtのそれよりも強いことが示された。

逆語順の3文型の習得過程を正答率の上で年齢別に比較してみると、oφV 文においての正答率は4歳群で38%、5歳群で52%と低いものに対して、70%を越えるのは6歳群からであり、8歳群以後正答率は高く、安定している。それに対してφsV 文で70%を初めて越えるのは12歳群の92%からであった。φtV 文ではいずれの年齢においても70%を越えることはなかった。

oφV 文において4歳群と5歳群の正答率が低かったのは、語順が動作主の判断の要因として強く作用した結果であると考えられる。特に4歳群においては、oが付いているにもかかわらず第一名詞を動作主と選択した率が助詞に基づいた選択率よりも高かった。

## 考察

Slobin & Bever(1982)によると、トルコ語において、語順の影響を受けずに目的格マーカーによる正確な文理解ができるようになるのは2歳頃からである。彼らは、このように早い時期からマーカーによる文理解が可能である要因の一つとして、トルコ語の目的格接尾辞が意味と表層形式が1対1対応しているuniform markerであることを挙げている。これに対して、伊藤・田原(1986)は、日本語の助詞ハとガは多重機能性を持ち、意味と1対1対応していないことなどを挙げ、そのためトルコ語の目的格接尾辞よりも文法的手掛りとして相対的な強さに欠け、幼児期後期であっても語順の影響等をうけてその獲得の時期が遅れるのだと考えた。田原ら(1987)は、韓国語の主格助詞-i/gaと主題助詞-eun/neunにおいても日本語の助詞と同様の解釈が可能であることを示した。

一方、日本語と同じく韓国語の中においても、それぞれの助詞によってその多義性は程度が異なり、獲得の時期は助詞の種類によって違っている。他動詞文を用いた本研究の結果では、目的格助詞-eul/reulの、文中での機能は対格であるのに対して、主格助詞-i/gaは主格と対格としての機能を持つ、より多義的な助詞であり、-eul/reulの獲得は-i/gaより早いであろうという我々の仮説が支持された。

実際の言語運用では、助詞等の文理解の手がかりが獲得の途中であっても、現象的には獲得済みのように観察されることもある。たとえば、李延燮ら(1979)の韓国語児の自然発話場面での構文発達の調査結果では、格助詞(主格、目的格、属格、補格、与格、位格)の正しい使用率は3歳頃にすでに93-100%に達していた。しかし、本研究の結果からは、語順に左右されること無く、助詞に基づいて文処理を文法的に正しい方法で行えるのは、かなり遅く、小学校以後であるといえよう。

特に語順に焦点をあてた今回の結果は、伊藤ら(1987)が日本語の助詞ヲ・ガについて得た結果とほぼ一致し、韓国語の助詞においても、その標識力及び獲得の順序は-eul/reul>-i/ga>-eun/neunであった。これによって、伊藤ら(1987)が用いた格標示力(ここでは、動作主性)という概念は、韓国語の助詞の獲得過程を明らかにするのにも有効であることが示された。文理解の手がかりが現象的には獲得済みのように観察されるのは、これらの手がかりが実験場面でのように競合するのではなく、実際には相乗的に働くからであろう。今後の課題としては、韓国語において助詞の使用・理解の開始から完成までの過程をより明らかにすることや、それを日本語の助詞と比較し、その相違を探ること等がある。